

まちづくりネットワーキングえひめ

舞 たうん

VOL 81

2004.7



アングル

恋人からおふくろへ	宮城県本吉郡唐桑町「牡蠣の森を慕う会」	畠山 重篤 1
特集	『自らが誇れる地域環境へ』		
地球の環境改善は海の浄化から	宇和島市／古谷 和夫 2	
千年の森をつくる暮らしひの広がり	川内町／鶴見 恵子 4	
環境改善と分別回収への取り組み	松前町／加藤 博徳 6	
総合的な学習の時間から地域へ広がった水質浄化への取り組み	上浦町／山口 良二 8	
自然体験活動による環境教育	四国中央市／石川 隆志 10	
論談一まちづくり			
市町村の未来は女性と老人次第	愛媛県環境創造センター／立川 涼 12	
キラリ光るまち			
都市と農村の交流による棚田保全の取り組み	香川県綾歌郡綾上町／岡 浩美 14	
若者とまちづくり			
第一回 若者と溜まり場	双海町／若松 進一 16	
トーケナウ 魚とミカンの町だけじゃない！「文化の町やわたはま」をめざして	八幡浜市／井上 千秋 18	
一期一会	松山市／田所 廉予 19	
媛のかわら版			
かけがえのない命と地球を守ろう（その1）	新居浜市／原 紗子 20	
MY TOWN うおっちんぐ 歩き目デス&足ラテス			
伊予路石橋ウォッキング	岡崎 直司 22	
研究員卒業レポート			
私のまちづくり考	愛媛県／山下 大成 24	
新鮮で貴重な2年間	瀬戸町／奥山 清司 26	
研究員レポート			
大森の町並みと生活保存のまちづくり～島根県大田市～	清水 和繁 28	
information センターからのお知らせ			29

「自らが誇れる

地域環境へ

今年の舞たうんは『地域資源』という年間テーマを掲げながら、一年間、それぞれの切り口で特集を組むことにしました。まちづくりの現場では、なくてはならない視点であり何が資源なのか、問い合わせいくことも必要です。そこで今回は、『自らが誇れる地域環境へ』と題して地域の自然や環境を守り、自然の尊さ大切さを地域に広めているグループに焦点をあて、特集を組みました。田舎には豊かな自然があると思っていましたが、実は、私たちの生活により、自然が壊されています。そのため大切な資源である自然をどう守り、どう改善していくのか、そして、その地域にしかない個性ある資源としてどのように活用するのかを考えみたいと思います。

(編集子
梅村)



柳原 あや子

東洋の真珠アコヤ貝養殖は、愛媛は日本一と思いつんでいたら、長崎が出て来て驚く。自然を相手に伝統を守り続ける難しさを痛感しました。真珠は日本人の肌に一番美しく輝き上品さを引き出すアクセサリーなのに、需要が伸びない。流行か、外国のブランドに抑される。

日本一の真珠を再び愛媛に、そして笑顔の輝く津島に取り戻そう。

表紙の言葉

特集



恋人からおふくろへ

宮城県本吉郡唐桑町

牡蠣の森を慕う会

畠山 重篤

二月末、高校の教科書や副教材を出版して

いる会社から問い合わせの手紙が届いた。

なんと、今年の愛媛大学の入試問題に拙著

「リアスの海辺から」(文藝春秋)の抜粋が

引用されているというのである。小論文問題

になつてゐるといふ。

それを小論不ツトというHPに掲載させて

もらいたいという依頼であつた。

同封された試験問題は四題ある。

①は、カタカナは漢字に、漢字はよみがな

を記入しなさい、とある。思わず笑つてしま

つたが、なかなか手強い。

②～④が文を読んで三十字とか、二百五十

字以内であなたの考えを簡潔に述べなさいと

いう小論文の出題である。

主旨は、漁民による植林活動を通して、環

境に対する関心を喚起させる、ということな

のだろう。それと、愛媛県は宇和海に面して、

リアス式海岸が続いているので、地元に根差

した出題とも言える。

宇和島藩と仙台伊達藩は、その昔縁戚関係にあつたことで親近感は強いのだが、もう一

つリアス式海岸を有していることでも共通性がある。

森進一の「港町ブルース」にも、宮古、釜石、氣仙沼、八幡浜が出てくる。

平成元年、森は海の恋人という標題を掲げて漁民による植林運動を開始したのだが、そ

の時点では「リアス式」という言葉の意味を正確に理解していなかつたのである。その規模の大きさからして、三陸リアス式海岸が、

その代表とさえ思つていたのだ。

ところが、その本家本元は、スペインのガリシア地方であることを知る。そして、リ亞

スの語源は、リオ(川)であり、この入り組

んだ海岸は元々川が削つた谷だつたのである。

その谷に、縄文海進で海がゆっくり入り込ん

で更に奥深くなつた地形なのだ。

だから、湾の奥からは、必ず河川水が流入している。川を遡れば森にたどり着く。森、川、海、このつながりで植物プランクトンが発生する。だから海が豊かなのである。

「なんだ、森は海の恋人の世界ではないか。」

私は、矢も盾もたまらず、二人の息子を連れて、スペイン・ガリシアへ飛んだ。

そこで新たな発見は、偶然にしては余りにも出来過ぎたような、自然、文化、歴史が重なつた世界であつた。

その見聞記を、「リアスの海辺から」として上梓することが出来たのである。極めつけは、ガリシアの海辺の同業者がここでは、エル・ボスケ・エス・ラ・ママ・デルマール(森は海のおふくろ)と言つていると聞いたことだ。

いつまでも恋人と呼んでいては、青臭いと言われるかも知れない。

四十五才で始めたこの運動は今年で十六年目を迎えた。

そろそろ「森は海のおふくろ」とスローガンを変えようか。:

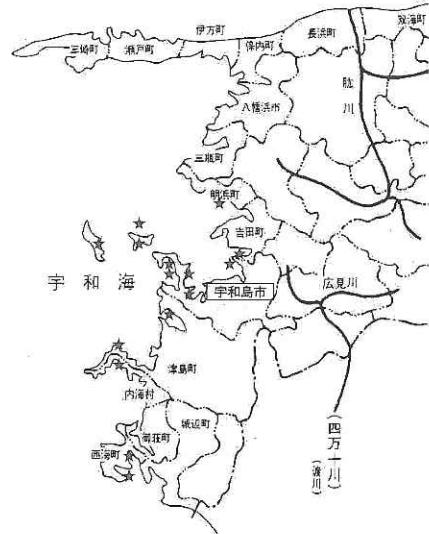
著書

- ・森は海の恋人
- ・リアスの海辺から
- ・漁師さんの森づくり 森は海の恋人
- ・日本汽水紀行

地域環境へ

地球の環境改善は 海の浄化から

**宇和島市
宇和海に緑をひろげ環境を守る会
代表理事 古谷 和夫**



○設立の経緯

日本の環境問題は明治二十年の足尾銅山の公害問題に始まり、戦後は昭和三十年から四十年代の高度経済成長期に四大公害（水俣病・新潟水俣病・イタタイ病・四日市ぜんそく）に代表される産業公害型が発生。昭和五十年代は自動車排ガスの大気汚染、生活排水等による水质汚濁といった生活型公害へ変化。昭和六十年代以降は、大量生産、大量消費、大量廃棄といった社会活動の結果、都市・生活型公害となり、それが地方都市にも農漁村にも、人の活動するすべての地に拡大した。

これらの環境汚染物質は、空中に拡散し、海へ流入する。海へ収斂される地球規模の汚染物質は、海の浄化力を超えて世界の海を汚染する。その海を生産の場としている漁業者は地球環境汚染の被害者であると言える。特に地球の温暖化は海水面の上昇もさることながら、水温の上昇が水棲生物の生存を脅かし海流異変を招くなど、漁業を直撃している。故に環境の污染防治の声は、海から漁村から発信するべきであると考える。

環境汚染がこれ以上進むと「地上の生物の生存が危うくなり、青い地球が回復

出来なくなる不可逆の時期が近づいている」と良識ある科学者が警告している。

地球の環境改善への取り組みは、地球上で、汚染を造り出している人類の義務であり、現存する人間の喫緊の課題である。ましてや漁業者は海の汚染の被害者であるが、また養殖業の普及について、加害者のサイドに立つことになつた。加害を少なくする、いや無くす手段はないか。危機感を抱く者の中から、今すぐ出来る事からまず始めるべきだと、九名が集まって、「地球の環境改善は海の浄化から」の理念の下に、平成十五年八月二日、事務局担当の村田八郎氏のビルで、NPO「宇和海に緑をひろげ環境を守る会」を設立。現在、賛助会員を含め、百八十二名になつてている。

○事業の取り組み

〔事業推進の前提条件〕

養殖漁場の浄化を進める前に、漁場の生産力以内とする適正養殖の確立を求めている。

一、海藻増殖による海の浄化

鹿児島大学の門脇秀策教授の研究要旨
「養殖生産による負荷は、養殖漁場と同面積の海藻の栽培によつて解消される」

自らが誇れる

をよりどころとして、宇和海域の漁協と漁業者に、海藻（コンブ）種糸の配布と増殖を推進している。

取り組みははじめたばかりで、少數の漁業者であるが、既に実施中の漁協の運動も入れると、宇和海では明浜漁協から津島町の下灘漁協までの全漁協と南宇和郡の二町村の漁業者・市民の参加（種糸参千六百m・約百名）があった。この他に、全真連傘下の県真珠養殖漁協（六十五名）がアラメ海藻の増殖を行った。なお、夏季のアナアオサの増殖も計画中である。



門脇教授の講演を聞く人でいっぱいの会場

二、石けん使用の啓発・普及

合成洗剤には、環境や生態系に有害との恐れのある化学物質が含まれており、これまでも各漁協の女性部が中心となり、石けん使用の啓発・普及活動を進めてきたが、漁村域に止まっている。

宇和島圏域に暮らす市民や農家へも、石けん使用の輪を広げ、地域の人々の一人ひとりが、環境への意識を高め、便りさや商品へのPRに流されない、自己責任の意識を高める活動を進める。

三、魚付保安林の管理保護

史実によると、江戸時代以前から、先人たちは、磯辺の森が魚の棲息に有効であることを体得していて、魚付林として大切に保護育成してきた。

明治の近代化の中で、保安林の一環として制度化されたが、強制法ではなく伝統や伝承の中で受け継がれてきた。ところが最近、その伝統・伝承が風化し、その所在さえ知らぬ漁民が多くなってきた。

私共は調査を進めて、魚付保安林の再確認を行い、行政と連携して、漁協が魚付保安林の管理と保護が出来る条件づくりを進める。

○これから展開

私どもは、「地球の環境改善は海の浄化から」と掲げているように、地球の環境改善を目指し、そのためには、先ず海水の浄化から始めようと取り組んでいる。

当面の事業としている海藻の増殖普及は、漁業者の自主的な取り組みが基本であり、本来、漁協活動の分野である。既に取り組んでいるU漁協やアラメ増殖を始めた県真珠養殖漁協と連携し、更に県漁連・全漁連に呼び掛けて全国の漁民運動に発展させて行きたい。

その活動の中で、今日の環境問題の多くは、私どもの日常生活や通常の事業活動の中で排出する廃棄物や汚染物質から来ている。

私たち市民自身も加害者であることを自覚し、地球環境の汚染がこのまま進むと「青い地球を取り戻せなくなる不可逆の危機」が近づいていることを再確認して、環境浄化について、自らの生活と事業の中に「今すぐ出来ることから取り組む」よう呼び掛け、市民運動として推進していく。

地域環境へ

千年の森をつくる 暮らしの広がり



川内町
えひめ千年の森をつくる会
世話人 鶴見 恵子



自然の中での生活

私たち夫の転勤をきっかけとして、愛媛県に転居し、千葉県で行っていた「千年の森をつくる」活動に継続して取り組んでいます。

地球環境が再生不可能なほどに悪化の道をたどっている今、子どもたちに自然体験の場を確保し、安全な食を得るために自ら作り、循環する暮らしを求めていく必要性を感じました。そこで、温泉郡川内町の棚田のてっぺんで、森林や田んぼに囲まれた自然の中での生活を選んだのです。

千年の森の六つの柱

千年の森をつくるとは、今ある森林が更新を繰り返しながら千年の後までも森林であり続けるように、森林を守り育っていくことです。ですから、屋久島の千年を超えた杉が生える森林も、いままさに苗木を植えたばかりの幼い森林も、それをずっと守り育てていこうとする人々がいる限り、ともに千年の森ということができます。

私たちの活動は、次の六つを柱としています。①森づくり、②世界に開かれた木炭学校、③自然農法が学べる場、④安

全な食、農林産物の加工が学べる場、⑤ありのままの自分に出会う場、⑥未来循環型自給をめざした生活の提案。

具体的には、毎月一回ずつ、一般の方を対象とした千年の森をつくる活動と、地元小学校のPTA主催による子どもたちの自然体験教室を開催しています。その他、不定期に自然農法や、炭焼きを体験する日も設定しています。



植樹の準備完了、千原千年の森

森林や棚田の恵み

早春に千年の森の仲間たちと広葉樹を植えた山へ、二ヶ月ぶりに行つてみると、クヌギや、ケヤキ、ミズメなどの幼木た

自らが誇れる

ちが、あちこちで日の光を浴びて、小さな葉を広げています。小さいながらちやんと親の形質を受け継いで、異なる葉をつけた幼木たち。元気に育っていたことにありがとうと心の中で声をかけながら、なんともいえないうれしい気持ちになります。間違えて切つてしまわないように、幼木の周りは特に注意深く、周りの草を刈りました。木を植えるということは、植えた木を守り育てる決心をすること、そして、すくすくと育つよう支援を続けること、と幼木たちが伝えてくれるようです。この木たちが育つにつれて、私たちに、きれいな空気を供給し、山に水を蓄え、棚田を潤し、作物を育ってくれるのだなあと、自然の循環にも想いが至ります。

棚田では、有機・無農薬でお米つくりをしています。手間隙はかかりますが、

土の中の微生物や小さな虫たち、螢やトンボが増え、自然が豊かに蘇っているこ

とを感じます。できたお米は飯ごうや、

お釜で炊き、畑で収穫した蕎麦は粉にし

て団子にし、小麦でうどんを作り、蕎麦の茎を燃やした灰で固めたこんにゃくを作るように取り組みも始まり、少しずつ

安全な食の体験もできるようになつています。



あいがもの気持ちになって草取り

地域の方や、地元の小学生や先生方、保護者、千年の森の仲間たち、みんなの力で、「千年の森をつくる」活動が充実していきます。

千年の森をつくる暮らしの広がり

ここでの活動は、各人の興味・関心・体力、気力、体調に合わせて、自分にちょうどよいだけ行うことモットーに、

無理をしないで、できるだけ長く、継続していく 것입니다。自然体験教室に通つ

た子どもたちが、将来、森林や田んぼの活動に関わりながら子育てをしていく人



さいわい窯とドラム缶窯で炭焼き

に成長することを夢見ながら…。また、県内の各地から活動に参加してくださる方の中には、自分の住む地域で、得意なことや個性を生かして、地域の仲間たちと森林や農に関わる活動を開催している方がいます。小さな拠点がたくさんでき、同じような志を持つものがネットワークでつながり、それが網の目のように繋がって、ゆるやかにしかも確実に、未来循環型自給をめざした生活の輪が広がっていくことを期待しています。

環境改善と分別回収への取り組み



松前町
中川原環境部
加藤 博徳



二〇〇一年、四月一日より家電リサイクル法が実施され、冷蔵庫、洗濯機、テレビ、エアコンの処理費用は有料化され、個人負担となりました。また、松前町内では、週に二回収集されるゴミ袋が、透明か半透明のものに指定されました。

このように、家庭から出される排出物に対しての規制が厳しくなる中で、中川原地区では、新たに環境部を設置し、排出物の分別回収と環境改善に取り組む事になりました。

まず、全戸を対象に排出物のアンケート調査を実施した結果、生ゴミが七十%を占めていることが分かり、『生ゴミを制する者はゴミを制する』という由縁が理解できました。

五、六月の二ヶ月間、全家庭を対象とした分別排出の勉強会を公民館で実施しました。特に生ゴミ処理については、生ゴミ処理バケツを使用して自己処理の方法を学び、実践しました。

併せて地区の方々の協力の下、リサイクルセンターを設置することが出来ました。六月には当町のモデル地区に指定されることとなり、分別回収を開始しました。

特に、家庭から排出される生ゴミの削減として取り組んだことは、生ゴミ処理

バケツとボカシ（微生物発酵促進剤）を全戸に配布して、堆肥化と自己処理の促進に努めました。

そして、リサイクルセンターが回収する、新聞、チラシ、厚紙、ダンボール、ビン類、缶類、ペットボトル、発泡トレー、乾電池、蛍光灯、天ぷら廢油等の三十品目については、地区の人で毎月二回当番を決め、交代で整理と処理のお世話を担当してもらっています。

古紙は紙ひもでくくつて出す。ビンは洗って貼紙は剥がして色別にして出す。缶は、アルミ缶、スチール缶、ブリキ缶に分け、発泡トレイは洗って乾燥して出た。



地区のリサイクルセンター



住民の手で分別され資源化されている

すなど、「ここまでしないといけないの？」と、スタート時は戸惑いの声もありましたが、徐々に慣れるにしたがつて定着しつつあります。

また、地域の方がゴミを通じて集まり、一緒になって分別等をしながら、語り合ふコミュニケーションの場になつてきています。うれしい事です。

回収物の再資源化も順調に進んでいます。初年度の二〇〇一年度に三十t、二〇〇二年度に四十五t、そして二〇〇三年度に四十六tの再資源化に成功しました。さらに、各家庭での生ゴミ処理状況についてアンケートを実施した結果、生ゴミの排出量は従来の約半分程度削減さ



分別され資源化される排出物

総合的な学習の時間から 地域へ広がった水質浄化への取り組み

—EM(有用微生物群)の活用—



上浦町
上浦町立上浦小学校
教員 山口 良二



初期の活動 EMとの出会い

平成十二年十月に、六年生の総合的な学習で「上浦の海の汚れ調べ」を実施し、予想以上に海が汚れていることが分かりました。自分たちの生活排水で汚れた川や海をきれいにしたいとあれこれ思案していた子どもたちに、EMを使ってはどうかと提案があり、試してみるとありました。

十一月、学校近くの川へEM活性液(以下活性液)を散布する活動が始まりました。昼休みと放課後にボランティアにより、手押しの一輪車にポリタンクを乗せて運ぶ地道な作業でしたが、意欲的に取り組みました。

活動の本格化

平地の低い上浦町では、塩害を防ぐため河口に「潮取り」と呼ばれる調整池を作っていますが、ヘドロが堆積し、悪臭が漂い、生き物の姿はあまり見られなくなっていました。平成十三年度の六年生は、この「潮取り」の浄化に取り組むことになりました。足が埋まり歩くのさえ困難で、これが改善されるのかと不安を感じましたが、役場や教育委員会、保護者の協力を得て活動がスタートしました。

また、給食センターとも連携しました。米のとぎ汁を毎日二十㍑もらい、学校で発酵液にして、学校と給食センターから十㍑ずつ流し、数ヶ月後、給食センター外の排水口の白い油汚れはなくなり、川底の砂が見えるようになりました。

水の浄化以外でも、給食の残食にEMぼかし(以下ぼかし)を混ぜて堆肥を作る活動を始めました。完成した堆肥を使って、サルビア等見事な花が長い間咲くようになりました。このような実践の成

六月には、活性液を散布していました。

ヘドロだらけの川底から砂が出てきました。

全面ヘドロに覆われて

いた潮取りに、八月には、足が埋まらない場所ができました。五月には全く見えなかつた杭が三十㌢以上も現れ、全体では推定約千八百m³のヘドロが減少した計算になります。悪臭も感じなくなっていました。そればかりでなく、子メダカや海ニナの大群、ゴカイ等の生き物が増えました。



ヘドロが減少し始めた潮取り

自らが誇れる

果は、四国EMフェスタ等で発表させていただきました。

EM活用の広がり

川や海の浄化にはたくさんの人々に参加してもらうことが効果的だと考え、学校で培養した活性液を、町内行事や催し物で配る活動を始めました。活性液をペットボトルに詰め「しまなみ春風ウォーカー」、「町民運動会」、「上浦いも祭り」等にかけて行きました。

お風呂に入るとアトピーがよくなつた、排水口のヌメリや臭いが消える、家庭菜園の野菜がよく育つ、洗濯の時洗剤が少なくてすむ、臭いも取れる、といった効果が知られるようになり、小学生のいない家庭でも活用が広まつていきました。さらに、ヒラメの養殖場や養鶏場、クリーンセンター等町内各所でもEMを活用するようになりました。

こうした動きを受け、町内の老人クラブや婦人会、消防団、漁業協同組合、役場等から、小学校の取り組みやEMの使い方・効果について説明してほしいと依頼が来るようになりました。その都度説明会を開き、子どもたちがペットボトル詰めした活性液を配りました。

この頃には、公民館のお世話で、EM

情報交換会が発足しました。ほかしを作ったり、EMを活用しているミカン園の見学に行つたりする活動も続けています。

また、公民館からの依頼で、町の広報誌に児童の取り組みやEMについての情報等を掲載するようになりました（EMレポート）。

役場・漁協のボランティア活動も始まり、潮取りへの活性液散布やEM土団子投入を実施しています。平成十四年三月には役場が培養器を三台購入し、一台が上浦小学校に設置されました。

上浦小学校の伝統として

潮取りの浄化活動は、平成十四年度以降も、六年生の総合的な学習の時間の取組として継続しています。EMを使った個人研究も実施しています。活性液を流し続けた排水口と流していない排水口との様子を比べた児童もいました。

「ふるさと

の海を美しく」という児童の思いから

始まつた本校の取組は、幸いにも、EM

との出会い、児童の前向きな取り組み、地域の人々の

支援等が幸いにもよい方向に作用し合いで、地域に根付いて成果を上げつつあります。今後も本校の特色の一つとして取組を継続していきたいと考えています。

直し、「さわやかEM委員会」を組織しました。給食の残食で堆肥を作つたり、持ち帰り用の活性液の世話をしたりしています。

西予市立高川小学校、伯方町立伊方小学校と環境浄化への取組を通じて交流を深める活動も四年目を迎えました。

地域に根付く取組

農薬の代わりにEMを使つた有機農業の勉強会が発足し活動を始めました。また、地区ぐるみのボランティアで川に活性液を投入し始めたところもあります。



EMなし（左）とEMあり（右）



EMで環境浄化に取り組む上浦の人々

自然体験活動による環境教育



四国中央市
宇摩ネイチャーゲームの会
運営委員長 石川 隆志



ネイチャーゲームとの出会い

もともと山登りや自然が好きで、かがわ自然観察会の会報で「ネイチャーゲーム初級指導員養成講座」の参加者募集記事を見つけた時には、ピンとひらめくものがあり、ネイチャーゲームについて全く何も知らないまま、友人と二人、一九九年三月に香川県満濃町で受講しました。

その講座は、二泊三日で、講義の時間にはネイチャーゲームの理念や指導方法等について学び、実習の時間には野外でネイチャーゲームを実際に体験するものでした。体を動かす楽しいゲーム、注意深く観察するゲーム、五感を研ぎ澄まして感じるゲーム、自然から受けた感動をわかちあうゲームなど、いろいろなネイチャーゲームを体験しました。

あいにく三月下旬の菜種梅雨の時期で、三日間、本当によく雨が降りました。そんな雨の中でも、合羽を着て外で実習しました。二日目の夜に「夜は友だち」というネイチャーゲームを雨の中で行つた時のことです。暗い夜道の中に、一人ずつ、ぼつん、ぼつんと離れて座つていきます。あたりは雨音だけが聞こえる静けさの中、暗闇に眼が慣れてくると、目の

前に一本の木があるのが、ほんやりと見えてきました。雨は、合羽を着て座っている私の頭上から絶え間なく降り続きます。その時、ふっと気づきました。「ああ、自分は今ここにこうして雨に濡れるに任せているが、目の前のこの木も同じなんだなー。ずっと、ここでこうやって大きくなつたんだなー。」と。自分もこの木も、共にこの地球(ほし)に生きているんだと実感したのでした。

帰りの車の中では、ネイチャーゲームの感動をお互いに語り合い、満濃町から三島まであつという間でした。

宇摩ネイチャーゲームの会の活動

満濃町から帰つて仲間とネイチャーゲームの会を結成して活動を始めました。最初は、友人知人とその子ども達で行つていましたが、一九九三年十月に一般参加者を募集して、「全国一齊ネイチャーゲーム大会」を翠波高原で開催しました。この年以降、春夏秋冬の年四回、地元の公園を会場にして一般参加者を募集しネイチャーゲームの会を開催しています。「細く長く」を合言葉に活動を続けて十二年目になります。そのかいあって、結成当時は二名しかいなかつた指導員も徐々に増え、現在では十一名になりました。

自らが誇れる

た。また、参加者には常連さんが多く、いつも、来てくださいます。スタッフと参加者に恵まれて、毎回、楽しく開催し、ずっと続いています。

さらに、保育園、小学校、児童センター等から依頼を受けて、ネイチャーゲームを行っています。



公園でネイチャービンゴの真最中

現在、一二三のネイチャーゲームがあり、身近な公園などで、子どもと大人が一緒に自然とふれあうことができます。日本では、社団法人日本ネイチャーゲーム協会が中心となり、全国各地に二百二十七の会があり、それぞれの地域でネイチャーゲームを行っています。

環境教育としてのネイチャーゲーム

ネイチャーゲームは、心とからだで自然を直接体験することによって、すべてのものがつながっており、自分もそのつながりの一部であることに気づくことを目的としています。これは、環境教育の①気づき、②理解し、③行動するという三段階の最初の段階です。この気づきの段階で、頭での理解や科学的な判断を越えて、人々の心の中に眠る、自然への愛情や畏敬の念を呼び起こします。

この愛情や畏敬の念は、自然をもつとよく理解したいという気持ちや、自然の中でのどのように行動すべきかを考える基盤となるものです。

ネイチャーゲームとは？

ネイチャーゲームは、一九七九年にアメリカのナチュラリスト、ジョセフ・コーネル氏により発表された五感を使って自然を直接体験するプログラムです。

ネイチャーゲーム推薦図書

『ネイチャーゲーム1改訂増補版』 ジョセフ・コーネル著 二〇〇〇年発行（柏書房）

『親子で楽しむネイチャーゲーム』 降旗信一著 一九九二年発行（善文社）

『ネイチャーゲームでひろがる環境教育』 降旗信一著 二〇〇一年発行（中央法規出版）

（社）日本ネイチャーゲーム協会ホームページ
<http://www.naturegame.or.jp>



いねむりおじさんというゲーム

市町村の未来は 女性と老人次第

愛媛県環境創造センター所長

立川涼



女性と老人が明るく元気な町

少子高齢化の進行は地方で速い。出生数を増やしても、その効果が出るのは早くとも二十年先である。とてもそれまで待つことはできない。それに出生数が増える確実な政策もない。

女性と老人の社会的参画が切札と私は考えている。人口の半分は女性であり、老人（定義にもよるが）の増加も当分続く。女性と老人が明るく元気のよい社会は、住んでみたい市町村を選ぶ重要な物指しであろう。

中高齢者の活躍の場

私は日ごろ、企業（役所も！）の採用試験での年齢条件の撤廃を提案している。

人材を養成する大学などの教育機関では入学に年齢制限はない。社会人入試では優秀な中高年者の入学が年々増えている。仕事の内容も大幅に変りつつある。筋肉労働、肉体労働の場面でも器材の発達・開発が進み、若い新卒者でなくとも十分働ける。その証拠にこうした労働の現場にも女性の進出は著しい。

現在の、またこれからの中高年者の職場で要求される人材の資質は、判断力や実行力である。大学人であつた私が言うのはおかし

いが、こうした能力は新卒の学生より社会的経験を積んだ中高年者が優るのがふつうである。

採用試験の年齢制限の撤廃は学生にも大学にも刺激になる。これまでの教育と研究のあり方や議論を見直し、新しい大學を構想する手がかりにもなる。先生も学生も勉強をさせられる。

中高年者の活躍は企業に限らない。詳しくふれる余裕はないが、これからの中高年者、多元価値社会、百人百様の幸福の実現を目指す時代には、職業もきわめて多様になり、これまで考えられなかつたような新しい仕事が生まれる。一例を挙げれば、NPOである。

女性の活躍の場

人口の半分（以上）は女性である。女性を活かすことができない組織や地域に将来性はないであろう。女性の学力が男性より優れていることは、国内外で多くの実証的調査がある。英國では、約十年ほど前に、生徒を対象に全国的な学力テストが行われた。結果は統計的に有意で女生徒の学力が高かつた。その時、関係者の解釈は女性は男性より生物学的発達が早く、学力もその反映であろう。大人になればその差は解消するというも

のであった。最近、当時の世代が大学生

の年齢に到達して、改めて学力テストが実施された。またしても有意で女性の学力が高かつた。関係者はそんなはずではなかつた、困つたと言つてはいるとも伝えられている。

日本でも採用試験などで女性の優位は明かである。学力試験でも優位であった女性は、二次試験での面接や論文ではさらに差が拡大する。自分の判断や意見を明確に説得力をもつて発表できるのは圧倒的に女性が多い。多くの組織が憲法違反といわれないよう、いかに男性を採用するかに苦心していることは、公然の秘密といつてもよい。

女性を採用しても育てなければ仕方がない。私が高知大学長だった頃、係長以上上の役職に女性が皆無なのに驚いた。早く人事課長を呼んで聞くと、適材適所、公平に実力を評価した人事をしているという。再度私は問い合わせた。大学職員はすべて国家公務員試験の合格者から採用している。採用時の成績は女性の方がよいという。それでは優秀な女性を採用しながら、十・二十年後には使えないといふのであれば、それは女性の責任（もくなはないが）ではなく、人事担当者が人を育ててこなかつたせいだ、責任をと

れと言つたものです。

月尾嘉男（現東大名誉教授）さんが、総務省審議官（次官級）だった時に若手の優秀な官僚を集めて作った「百年の転換戦略研究会」の検討結果が、『日本百年の転換戦略』（講談社、二〇〇三）として出版されている。文字通り日本の百年を考えるのに参考になる本です。

この本では、二十一世紀は生産優先から生活優先へ、そして生活優先がもたらす地域の再生が大きなテーマです。ここでは女性の役割が大きいことも指摘されています。

ところが、この総務省の研究会メンバー十五人がすべて男性なのです。私は月尾さんに、生活優先、女性と言ひながら生活実感のない東京の男ばかりの役人が作つた文章、どこか作文臭がすると言つたのです。月尾さんも私の指摘は痛かったようですが、省内で優秀な人材を集めたら男ばかりだつた、総務省でも女性キャリアは採用しているが、省の中 心となる重要な部署に配置されない。女性を育てていないと言つてました。

女性と老人次第

老人のところでもふれましたが、これらの社会、女性の活躍が期待される場

がますます増えます。とくに地域、市町村では然りです、女性を活用できない市町村の未来もないのです。

女性と老人は、町の住人に限りません。町外、日本さらには、外国人も参加してほしいものです。

さまざまな社会のセクターからの人びとの活動を実現するためには、情報公開による問題意識の共有と、重要な意思決定や政策・計画の立案のはじめからの参画（参加ではありません）が望まれます。

香川県綾上町

都市と農村の交流による 棚田保全の取り組み



綾上ふれあいネットワーク

会長 岡 浩美



してもらえるように「自然体験ツアーや企画しました。特に栗拾いは好評で「いい付きの栗拾いができる」と地元産の米「綾の舞」のむすびとけんちん汁に子宝漬けという素朴な昼食の接待が参加者的心に伝わり毎年参加してくれる方が増えています。

棚田ビレッジ会が棚田を保全

このような活動が認められ「平成十四年度共助型集落営農推進事業」の事業業務委託を受けることになり、「棚田ビレッジ会」の支援活動内容の作成・ボランティア募集資料の作成とホームページの作成・ボランティアグループの規約づくりなどを行いました。棚田ビレッジ会は荒廃していく棚田をボランティアの力によって保全を行うことが目的で、県農業経営課の支援を受け、平成十四年四月に発足しました。

当初の会員数は一般募集を行い趣旨説明や活動内容などを協議した後に、この会に賛同していただいた会員五十三名で発足しました。年間十回の年間計画にあわせて支援を行い、支援日には午前九時に棚田に集まり会員それぞれが支援作業を行いました。第一回の支援日に活動拠点の休憩所造りや鎌で畦畔の草刈を行

若者がボランティアでまちづくり

琴電陶駅から南、高鳴峠を上りつめると高鉢山を代表とする綾上町が開けます。人口約六千人、面積七十二平方キロメートル、大小数本の支流が合わさり全長三十八キロメートルの綾川のうち十九キロメートルが綾上を流れています。

兼業農家がほとんどで、特に中山間の農地は後継者不足により放棄され、山に返されています。後継者不足と少子化が進む我が町で若者のボランティアでつくる「綾上ふれあいネットワーク」は、平

方には紹介しようとしたが、中山間の地域と都市との交流を新しく始めました。まずは、日常ゆづくりと触れ合うことが多くなっている親子を対象に一般募集を行い、自然を通して親子のふれ合いを行

ます。日常ゆづくりと触れ合うことが多くなっている親子を対象に一般募集を行いました。第一回の支援日に活動拠点の休憩所造りや鎌で畦畔の草刈を行

ンジしました。また、会員と一般の参加者との親睦を兼ねて棚田で収穫した野菜を食材にした収穫祭を開催しています。

たなび会員が中心に地域の活性化



みんなで野菜の管理や畦畔の草刈をしている

ことから始まりました。

真夏の過酷な草刈作業でかいだ汗はいつもと違ひ肌に風が当たったときはなんともいえない爽やかな気持ちになります。しかし、支援作業が何時も爽やかではなく、支援日の天候が雨や猛暑の日もあり作業がしにくいこともありました。そこで棚田を保全しやすいような活動内容を検討しました。あくまでもボランティアで管理しやすい作物を栽培することができ、活動一年目にして望ましいといふので、大豆の栽培や、サツマイモのつるの植え付け、そして野菜作りにチャレ

初年度の支援計画が終了した時点で次年度から棚田ビレッジ会を継続するか否かを会員に諮り、意見を取りまとめた結果、各会員それぞれが自由に支援を行える日として、毎月第二・四日曜日を支援日としました。支援日は自由参加と位置づけ午前九時に棚田に集まり午後三時に解散することにしています。そして棚田支援体験日を毎月第四日曜日にして、広く棚田ビレッジ会の活動を理解し参加していくだけるようにしています。

会員にはなれないけれども棚田ビレッジのイベントには参加したいという方もずいぶん多くなってきているため、「最新夏休みだヨ！棚田で自然体験」や秋の収穫祭そして餅つき体験など、昔懐かしい行事や親子で参加して楽しめる体験できるものを中心に棚田イベントとして開催しています。

棚田でやつてみたいことを会員みんなで話し合い検討し



秋の棚田の風景

ながら活動を行っていますが、棚田で行う支援作業が想像以上に過酷であつたためか発足時の参加人員は少しずつ減少していましたが、広報活動（棚田写真展）や棚田でのイベントの開催により、当初の会員の半数くらい入れ替わり、現在は四十六名のたなび会員が活動しています。地元で農作業をする人の年齢が高齢化するにつれて、年々管理できる耕作面積が狭くなっていますが、棚田を自然に帰すことなく、地元の農家の方たちの農作業を支援するという目的のもと地域の人も会員もお互いに楽しんで農作業を行い、棚田も守る活動を広げていきたいです。
(綾上ふれあいネットワーク事務局)

香川県綾歌郡綾上町山田上甲2222
電話 0891-878-0751

若者と溜まり場

えひめ地域づくり研究会議

代表運営委員 若松 進一

高校を卒業し地元に帰つて間もなく青年団に入団してからこれまで、まちづくりでもいうべき地域に根ざした社会参加活動を続けてきた私にとって、最近最も気がかりなことは、まちづくりの実践の現場やまちづくり研修会の席に若者の姿が見えにくくなつたことである。

若者はいつの時代においても鋭敏な感覚と柔軟な思考で未来を先取りし、パワフルな行動力で地域をリードしてきた。その過激ともとれる速さや夢の大きさゆえ、急激な変化と変革を望まない社会から、時には「今時の若い者は」などと疎んじられることもあつたが、彼ら若者が掲げた価値観変化の仮説は、時代を経た今ではすっかり定説となつて社会に生かされ、社会の仕組みをも変えている。三十年前に三十年後の今を想像した仮説が

定説になるのであれば、今想像して否定される三十年後の仮説が、定説にならないうとい保障は何処にもないのだから、これからまちづくりは、若者の夢語りに耳を傾けその実現に努力することが求められるといえよう。

そこで私の経験を踏まえながら思いつくままにシリーズで、「若者とまちづくり」について幾つかの切り口から叱責を覚悟の上で述べてみたい。

私は青年団活動を八年間経験し愛媛県青年団連合会の会長をも務めた経験から常日頃、青年の溜まり場と青年に身近な存在のアウトドアの必要性を痛感していたが、当時教育委員会で公民館主事として青年教育に携わっていたこともあって、アウトドアとなり自らもインリーダーを経験したこともあり、青年の溜まり場を自費で作ろうと計画し、青年の力を借りて小さな庵を自宅横に建設した。廃材などを利用した僅か四畳半の真中に囲炉裏を切った手づくり庵は昭和五十二年春に完成したが、これまで築後

来た日本で一番海に近い下灘駅という無人駅で開いた「夕焼けンサート」がきっかけであったが、その夢想像の場となつたのは私設公民館「煙会所」であった。どのまちでも青年たちが夜を徹して話す溜まり場はそんなに多くはない。酒を飲むと車に乗れない現代社会事情では、かつての青年がそうであったように、酒の勢いなど借りて議論が大いに盛り上がりされることなどまれで、たとえ公民館などに集まつても本音どころか建前の域を脱しきれない集会が多い。ましてや集まらないのか集められないのか分からぬが、青年を集めることなど神話に等しいと嘆く者も多いようだ。

若者夢想像の場となつた「煙会所」

双海町は隣接する伊予市、中山町との合併（平成十七年三月末）が予定されている人口五千五百人足らずの小さな町である。農山漁村のとりたてて特徴のないこの町が、夕日の町として大きく変身を遂げたのは、フーテンの寅さんもやって



囲炉裏を囲んでまちづくりが語られる煙会所

二十八年間に「煙会所」を訪れた人は数限りなく、今では地元から域を広げ全国のまちづくりに関わる大勢の人が集まり隆盛を極めている。特に「煙会所」教育に感化を受けた若者が来庵帰郷後溜まり場作りに呼応して、北は青森県三戸郡倉石村の「八心堂」から南は奄美大島瀬戸内町の「第十七縁開所」まで、実に十七ヶ所もの広がりを見せていることは嬉しい限りである。ちなみに近くではちりん農園主の西川則孝さん（周桑郡丹原町）が「第二縁開所」として分家している。

「煙会所」の特徴は何といつても囲炉裏である。囲炉裏は薪を燃やして体を温める他、薪を燃やして煙を上げ存在を知らせ、薪を燃やして食い物を作り、薪を燃やして灯りにしたりとその生かし方は様々で、囲炉裏を囲んだ暗闇の空間で車座となつた若者たちの心が一つになつて熱く燃え、会話は集まつた青年たちを夢の世界へと誘うのだ。

「煙会所」の板間は時として黒板に変身する。学校から貰つてきた白や赤や青のチョークを使つた夢の絵は書いては消され頭と心に強くインプレットされて行く。「煙会所」の窓から見える上灘漁港の灯台や、双海のシンボル本尊山、西瀬戸に沈む夕日、時折通る銀河鉄道（四百メートルの鉄橋を特急列車が走る様）の風景も思考をかき立てる立派な道具立てである。かつてN H K のカメラマンが「明るい農村」というテレビ番組を双海町へ撮りに来た時、間違つて下灘駅に降りたエピソードから自分の心に潜む夕日の潜在能力が顕在化した話や、全国行脚で確かめた西瀬戸の水平線に「ジユーン」と音を立てるようすに沈む双海の夕日の美しさを熱っぽく話す私の言葉に心を揺り動かされた若者たちは、次第に「夕焼けコンサート」なる夢に向かつて走り出してい



煙会所の外観

歌歌手だと思つてゐる漁村の若者にベートーベンのクラッシック音楽など理解できるはずもなく、最初から暗礁に乗り上げたが、それでも基本コンセプトは「夕日」が主役であることの認識で一致していたため、その機会は意外と早く訪れた。しかし日本で一番偉い音楽家は演

「継続して良質の文化事業を行えば地域の活性化につながるし『文化の町やわたはま』のイメージを定着させよう!」を目標に、民間主導型文化発信団体「メセナ八幡浜」(以下メセナ)が発足したのは、平成六年一月のこと。会員を募り、その会費収入で運営を行い、メセナは文化芸術を、ナ・生で見よう!を合言葉に美術・音楽・伝統芸能・演劇・映画等と広範囲に自主事業を開催している。私は発足三年目から、この団体の企画運営スタッフとして参画している。

七年間の活動を振り返って思うことは、「人は、熱しやすく冷めやすいものである」ということ。メセナ発足当初は、目新しさもあり、企画する事業ほとんどが盛況だったようだが、私がスタッフとして参画したころは、その熱も冷め始めた時期でもあった。一時は千三百人余りいた会員数も入場券販売等の協力企業も、年々減少していく。事業を行なうことが主体であるメセナは運営資金が無くなれば、即解散となる。そうならないためには何をしなければならないのか、いつも考えてきた。魅力ある事業を行うことが一番ではあるのだが、金をかけずに

質を落とさず、口で言うのは簡単だ。とにかく『続ける』を目標に、なんとか十年。今まで続けてこられたのは、メセナの活動を認め、支持してくれた方々のお陰である。美術展・コンサートは恒例事業として定着し、毎年心待ちにしてくださっている方も増えてきている。努力が報われるようで大変うれしく思っている。

魚とミカンの町だけじゃない! -「文化の町やわたはま」をめざして-

八幡浜市教育委員会
学芸員

井上 千秋



さて、「文化によるまちづくり」は、文化事業を外から誘致することだけに限らない。地域に『あるもの』に目を向け、私が事務局をしている「濱知の会」(八幡浜を知ろう)もそのひとつ。不定期に勉強会を開催し、歴史や民俗・町並み・自然など、ジャンルを問わず学んでいる。

回を重ねることに、知らなかつた八幡浜が発見でき、とても面白い。周りを見渡せば、各地区に代々受け継がれている伝統芸能(神楽や唐獅子舞等)や、先日国の天然記念物に指定された「大島シユードタキライト(岩石)」、重文の梅之堂三尊仏などの文化財も多い。これらを広く地域の人々に伝えていくことも、行政で文化振興を担当している私の大切な仕事である。

『基本は人!』これが今、痛切に感じていることだ。何事も地域に根付かせるためには長い時間が必要だ。長くなれば、ひとりでは背負いきれないことが増えてくる。どんな団体でも核となる人物は必要だが、核を失つたら自然消滅してしまうようではいけない。行動している一人ひとりが、自らが核であるという自覚と認識を持つことが不可欠である。メセナにしても、十年間続けてこられたが、この先も様々な芸術に触れる機会を提供していきたいし、まだ「やわたはまは文化の町」と胸を張つて言えない状況だ……。とりあえず、この先十年!を目標に頑張りたい。そのためには、『ひとづくり』が重要課題だと思っている。

Talk Now

私が、庚申庵俱楽部のスタッフの説いて受けたのは、まだ松山東雲学園で働いていました。ご存知の方もいらっしゃると思いますが、庚申庵俱楽部が松山市からの委託を受けて管理運営している「庚申庵史跡庭園」は、二千年に松山東雲女子大学の学生による政策論文を機に、修復・復元され、新たに生まれかわった施設です。学生の呼びかけが行政を動かした!ということで、大学内でも話題になり、古建築や短詩系文学専門の先生や大学関係者が多く係わっていました。が、正直なところ、最初に誘いを受けたときは、「NPO法人?」「庚申庵?」「栗田櫻堂?」初めて耳にする単語ばかりで読み方さえ分からぬ。私がこれからやせんでした。じゃあ、ちょっと勉強してみるか!という好奇心のかけらが始まりでした。

庚申庵は、江戸時代後期の建物で、俳人の栗田櫻堂が、町の賑わいから少し離れたところで俗世の利欲から離れ、心静かに「市中の隠」を楽しむために建てた草庵です。いつ壊れてもおかしくないほど粗末なものが、二百年もの間、空襲や地震など崩壊の危機を免れ、また、持ち

主たちによって大事に守られ今まで奇跡的に残つきました。末永く遣し伝えていくため、建物は研究者や職人たちのこだわりを結集させ、創建時の庚申庵を復元されました。庭は、五十年、百年後を見越して新しくやりかえられたので、現在は、復元前のしつとりとした趣のある雰囲気を味わうにいたりません。ただ、

一期一会

松山市
NPO法人
GCM 庚申庵俱楽部
スタッフ

田所 慶子



庚申庵史跡庭園は、建物と庭とが一体化してはじめて栗田櫻堂の求めていた空間が復元される場所なので、できるだけはやく、自然なかたちで、雰囲気のある場所になるようボチボチ頑張ります。

また、生まれ変わった庚申庵は、全国的にもめずらしい運営方法を取り入れています。NPO法人による管理運営です。

全国的にみても稀な手法を愛媛県松山市が試みる。このギヤップを理解しつつ、庚申庵俱楽部がやらなければならないことを探し続けるのは、わりとプレッシャーで、私の頭や身体はかなり混乱していました。時間が経ち、市役所の人たちに助けられ、いろいろなイベントをこなし、たくさん的人に出会ううちに、頭も身体も慣れてきて、「やりたいこと・やれることをやるだけ」という、シンプルな答えにたどり着くことができました。つまるところ、それを迅速に偏ることなくやることが、庚申庵俱楽部の役目だと私は思います。

庚申庵が、老若男女問わずの癒しの場になりえることを、ひとりでも多くの人に知らせられるよう、庚申庵俱楽部は活動を継続していくので、みなさま、ご協力をお願いいたします。

ひめ 媛のかわら版

かけがえのない命と地球を守ろう!!

—子どもたちが、いきいき生きる社会をめざして—



新居浜市 元グループひまわり

代表 原 綾子

食品公害勉強会の誕生

「食品公害勉強会」誕生のきっかけは、全国婦人会議から会議員の募集があることを聞きつけ、作文を書いて応募したところ、思いがけなく選ばれたことです。昭和四十六年四月、私が三十九歳の時でした。

全国婦人会議は、現在の日本女性会議の前身で労働省とNHKの共催で運営されていました。当会への参加は、私に驚きと感動を与えてくれました。その感動が、三十九年間眠っていた私の能動性を呼び覚ましたようです。

私は早速、全国的に活動している婦人団体の二団体に「食の学習セクションを作ってください」とお願いをしました。が、結果はどちらの団体もすぐさま断られました。冷静に考えれば、それは当然のことですが、当時、私はかなりショックでした。そこで独自のグループを作るより方法がないと、我が子が通う幼稚園の母の会から仲間を誘つて「食品公害勉強会」の誕生となりました。当時、東京教育大学に内地留学していた夫からは「学習会だけだぞ! それ以上は駄目だ」と強く釘を刺されたことを思い出します。

「食品公害」でした。グループ名はこのテキストから取りました。

当時は今と異なり食の不安材料がいろいろありましたから、「或る日、子ども達がバタバタと倒れることがあつたらどうしたらいいの、子ども達に言い訳できないよ、「母さん達もがんばっていたんだよ」とせめて言い訳ぐらいは出来るよう頑張りましょう。」がグループの合い言葉となりました。



A F2抜き、丸大豆の流通

当グループの活動としては、週一回位の割合で学習会を開きました。そして、そ

の年の十一月、私は夫との約束を破つて行動を起こしました。当時の「山根生協」に豆腐などを納入していた業者に働きかけたのです。「A.F.2殺菌剤は発ガン性があると言われていますので取り除いてください。」「凝固剤にはニガリを使用してください。」「原材料としては丸大豆のみにして下さい。」とお願いしました。

山根生協への納入業者は、山根大通りに店を構えた渡辺製豆でした。社長さんに賛同をいただき、昭和四十六年十二月から、安全で安心な本物の豆腐が流通を始めたのです。渡辺製豆はその後、閉店することになりますが、その技術は当時的新居浜製豆に受け継がれました。



翌年七月には、学校給食用パンに使用されていた流動パラフィンの毒性を訴え、県内では使用が中止され、活動の成果を実感しました。その他にも、消費者相談窓口の開始や、螢光増白剤不使用のフキン使用運動、東京都豊島区の大豆かすを原料にしたサンダーレッド石けん工場の見学などの活動を行いました。

グループひまわりとみかん石けん運動

昭和五十七年七月に「かけがえのない命と地球を守ろう」のスローガンを掲げてグループひまわりと改名しました。行政の仕事には積極的に協力参加しながら、伝統食品作り、子どもパン教室、石けんを広める運動、洗濯講習会、子ども石けん教室シリーズ、包装容器、プラスチックの安全性のアンケート調査、ごみ問題など活動が広がりました。



同年四月からは、てんぶら廢油のリサイクルとして、ゼリー状のみかん石けんの普及活動を開始しました。そのためには作成した資料は、県内はもとより全国に五千部余。さらに中国大陸までも送られました。県内では女性リーダーの研修用資料にも利用され、講演の依頼も東京や栃木などの遠方からもあり、活動に対する自信も生まれました。

また、広島大学の城雄二助教授の著書、「もう毎日が洗たく日」の改訂版にも、みかん石けんの関連資料が掲載され驚きました。

活動の根っこ

グループひまわりの特徴ある活動の一つは、子ども達を巻き込んで活動していることだと思います。子ども達の笑顔に、その健康な瞳にグループ員は明日の勇気を貰い、生きないと輝くのです。

子ども達に対して、母親としての責任を持つことから始まったこの活動が、地域の人々を巻き込み、助けられながら、ここまでできた事にやりがいを感じています。

②



支保工の模型を使ってミニ石橋を出現させてくれた、会員の高川正秀氏。

①



"MY TOWN, うわっちゃんぐ"

歩き目デス & 足ラテス

第28弾

伊予路石橋ウォッキング



岡崎 直司

まず、アーチ石橋のルーツとして、長崎の眼鏡（めがね）橋群がある。一六〇〇年代に中国人が手がけ、以後九州各地に広まることとなる。その一方で、沖縄にはもとより、一四〇〇年代からもののが存在していく、中国と近接立地するその関係性が推察される。やがて日本人自らが技術習得をし、スパン（橋脚の径間）が二十mを越えるものも出現するようになり、規模では熊本に軍配が上がるが、靈台橋、通潤橋のような二十八m級の大アーチ橋が一八〇〇年代半ばに完成する。その後の調査により、現在までのところ、

それもそのハズ、石橋、特にアーチ石橋は九州が本場で、四国では殆ど見かけない。しかし、あまり知られていないが、実は無いことも無い。それを確認したい一念でここ十年ほど会員を続けている。それでは、四国と九州の違いを概況的に述べてみよう。

さて、四国である。徳島県にドイツ橋というアーチ石橋が存在する。規模はさほど大きくなはないが、大正八年に完成した立派なアーチである。第一次世界大戦で捕虜となり、鳴門市の坂東収容所での生活を余儀なくされたドイツ人たちの手になる、という特異なものである。近くの坂東川から採石した和泉砂岩が使用されているらしい。

ほかに香川・高知両県では、寡聞にしてあまりアーチ石橋は聞いたことがない。では、我が愛媛はどうか。いくつか上げられる。新居浜市の旧別子に面白いアーチ構造物があり高橋（たかばし）と呼ばれる（写真③）。実は私の調べた範囲では、今のところこの橋が四国では最も規模の大きいアーチ石橋である。ただ、正確にはこれは長さ五十mにも及ぶ大暗渠としての構成の一部で、明治十二年に

先日、五月の連休明けに、筆者は熊本へ出かけた。「日本の石橋を守る会」の総会（写真①）があり、参加した次第。先号でご紹介した西条市禎瑞の水路橋「掛け橋」保存について情報提供する意味もあった。今回の参加で、何を隠そう拙者四国で唯一の同会会員であることが判明した。

概数ではあるが、最も石橋の現存数の多いのが大分県の五百基、鹿児島県の四百基、次いで熊本県の三百基と続く。このように、石橋があると言つてもその数は半端ではない。昔はもつとあつたことにあり、例えば熊本では、その昔六百基ほども作られたことが分かつていて。つまりこれまでにその半数が壊されたことになる。

かつての別子銅山の精錬所がこの上に設

営されていた。しかし、未曾有の大水害

「銅山時化（しけ）」によつて、同三十
二年、その四分の三が大破した。つまり、
小足谷川沿いの平坦地造成技術が生んだ

アーチ構造の遺物ということになる。石材は、緑泥片岩の青石で、その組み合わ

せは粗野でダイナミックなアーチである。

古いところでは、元禄十一（一六九八）
年頃と伝わる松山市御幸の龍泰寺橋（写
真④）がある。寺の門前に架かり、一本
モノの花崗岩の石をうまく輪石（わいし）
に取り製作されている。全国レベルでも
古い部類に入るが、正確な施工年・製作
者など詳細は不明である。大水の度に撤
去の話が出るもの、ナントカこれまで
は保存されてきた。が、説明板も無いの
で気付く人は少ない。

川之江市いや四国中央市にも、川之江
八幡神社に参宮橋（写真⑤）という石橋。
全國的に珍しい迫持ち（せりもち）構造
の石橋。瀬戸町塩成にある要橋、保内町
の赤ひげ橋（写真⑥）、肱川町の河床（こ
うとこ）橋。これらにはどれもある共通
点がある。石材が緑泥片岩の青石である
こと。それそれが地層的には三波川變成
帶の上に立地する。青石は節理によつて
層状に割れる性質があるので、アーチに
する場合はこうした迫持構造となる。



旧別子山村 高橋



松山市 龍泰寺橋

④



川之江
参宮橋
天明年間
1780年代

河床橋には石灰岩も使用されているよう
だが、旧別子の高橋は例外である。

こうしてみると、どうやら四国に石橋
が殆ど見られないのは、使用石材の問題
がありそうである。九州の場合は、その
殆どが阿蘇凝灰岩と呼ばれる柔らかく加
工しやすい石が豊富にあり、しかもかの
石の性質として水を吸うのでよくしまる。
人力で加工する場合、明治以降の近代な
ライザ知らず、花崗岩や青石のような堅
い石を加工する技術の問題もあつたであ
ろう。まだナゾの全面解決とはならない
が、石橋技術が豊後水道を渡らなかつた
意味については、引き続き今後も意識し
たいと思う。



保内町
赤ひげ橋
明治初

⑥

—私的まちづくり考—

前主任研究員 山下 大成

三年間を振り返って

センターでの一年目は、自分にとつて、自分の住んでいる地域を見つめ直し、故郷との折り合いをつけることとなつた年であり、これが自分のまちづくりの出発点となつた。

まちづくりの導入編として、「まず、地域のことを知り、地域に愛着と誇りを持つこと」の大切さを教わったのは、次の三人のまちづくり人との出会いがきっかけである。

一人目は、熊本県水俣市の職員で、「地域元学」を提唱・実践されている吉本哲郎氏であった。水俣では、吉本さんとお会いして、「自らの住む地域を知らず、誇りを持って語ることのできない」我が身の情けなさを思い知られた。

二人目は、広島県総領町教育長で、過疎を逆手に取る会家元の和田芳治氏である。氏は、親たちが自分の生き方に自信を失つたため、子供たちに対して、「地元に誇りを持ち、地元にこだわる教育」ではなく、「努力に努力を重ねてふるさとを捨てさせる教育」を行つてゐる現実

を厳しく指摘されていた。
三人目は、地域づくりリーダー研修会の塾長として長らくお世話になつた、愛媛大学教授の讃岐幸治氏である。讃岐先生には、「無知から愛は生まれない」との言葉どおり、地域について学ぶ必要性を教わつたほか、後述するように、「まちづくりは自分でつくり」であることを教えていただいた。

二年目は、具体的にまちづくりをどう進めていくべきかについて、「地域経営」や「マーケティング」をキーワードとして、まちづくりの手法・方法論にやや特化した年となつた。

地域経営については、近年、行政にもNPM(ニューアブリックマネジメント)の概念が導入されつゝあり、企業のみならず、行政やNPOなどの非営利組織においても、「運営から経営への意識改革」が求められる時代になつてゐることは、既にご案内のとおりである。

また、マーケティングについても、住民視点、生活者視点という点では、行政も企業と何ら変わりはないはず。「生活者の『ニーズ』(必要)と『ウォンツ』(欲求)を先取りして、その変化に対応する」のがマーケティング。(西川りゆうじん氏)だとすれば、顧客満足度を高めていくことを目指すマーケティングの手法は、

サービスの向上、住民のQOLを高めることを目標とする行政にとつても、参考にして取り入れていくべきものであると考える。

そして、三年目は、まちづくりの手法・方法論から、今一度、まちづくりの理念・目的へと関心が移つた年であり、結果的に、一巡して元に帰つたような気がする。ブランドを生み出す基礎には、時代や生活者のニーズに合わせて変わっていく部分と、変わらずに守り続けていく部分としての根つことなる哲学・思想があるという。あくまで、その根底に変わらない哲学があつて、次にツールとしてのマーケティングがくるのだということに思い至つたためだ。

そのことに気づかせてくれたのが、研究員としての大先輩である東予市の近藤誠氏であった。センター共催のあるフォーラムにおいて、基調講演で手法・方論の講演を県外講師にお願いしたが、その後の分科会とのつながりが今一つの感があった。これは、講演の内容云々ではなく、方法論が前面に出過ぎて、本来のフォーラムの趣旨が参加者の間で十分に共有されていなかつたためと思われる。これについては、事前に近藤さんから指

摘を受けていたとおりの結果となり、事務局の目配りが不足していたことを深く反省させられた。

地域づくりは自分づくり

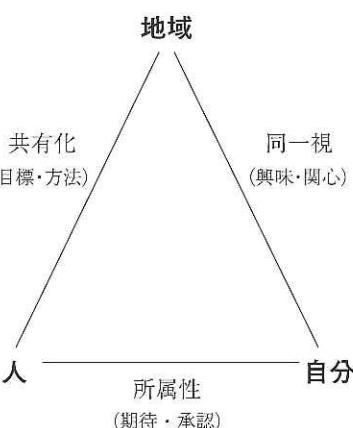
さて、自分にとつて、「地域づくりとは何か」ということは、センターに入つて以来の懸案のテーマであった。「地域づくりは人づくり、人づくりは自分づくり」（森巖夫氏）とは、よく言われるところであるが、前段は理解できるものの、後段の部分が、長い間よく理解できなかつたのだ。そして、これについては、前述の讃岐先生に学ぶことが多かつた。

センターに入つて早々に、讃岐先生に挨拶にお伺いした際に、先生は、「地域づくりは自分づくり。自分を変えていかないと意味がない」と語られていた。その後も、自分の中でこの言葉は強く印象に残つていたが、二年目も終わりに近づいた頃、先生の講話を聞いて、眼から鱗が取れると言うべきか、自分がそれまで求めていた答えがそこにあつたことに気づいた。その講話で、先生が語られた内容を要約すると次のとおりとなる。

- ・まちづくりをやるには、次の三つの「知る」ことが必要となる。
①「自分を知る」
②「地域を知る」（カーチャー体系）、③「人を知る」（ソーシ

ヤル体系）の三つである。

・地域づくりは自分づくり。自分づくりとは人との関係づくり。人間の存在を決定するものは、人間そのものではなく人間関係である。



最後に

三年目の途中ぐらいから、センターで出会つた人たちの言葉の中に、まるでデジヤブーのごとく奇妙な一致（符号）を見出しがちになつた。特に、多くの人や書物と出会うたびに、讃岐先生の言葉を思い起こすことが多くなり、あまりに身近な存在であつたがために、灯台下暗しで、先生の有難さを見失つていたことに気づいた。人事異動が決まってから、これまでの非礼をお詫びするとともに、この卒業レポートでの紹介をご了承いただいた次第である。

三年間、研究会議の運営委員の方々を始め、たくさんの皆様に大変お世話になつたことを、この場を借りて厚くお礼申します。

という間に、ようやく答えを見出した頃、その先を示唆してくれたのは、また近藤誠氏であった。氏が語つてくれた内容を、自分なりに解釈すると次とおりとなる。

「市民一人ひとりが町を良くしていくというような難しいことは考えず、自分の幸せをこの町で高めるためにいかに頑張つていいか。言い換えると、いかに自分にとって住み良い、快適な町にしていくかを考えていくことこそ大事だ。」

新鮮で貴重な2年間

瀬戸町 奥山 清司



センターから瀬戸町役場に帰つて、三ヶ月が過ぎた。正直、あつという間とはこのことなんだと感じている。松山にいた二年間のことを振り返るようなそんな感情も沸いてこなかつた。今、こうして文章を書いていく中でいろんなことを思い出す。

センターでの経験

センターに出向するまでは、瀬戸町の教育委員会での仕事しかやってこなかつた。毎日行事に追われるだけで、それをこなす毎日だつた。センターへの出向が決まり、松山での仕事が始まつたわけだが、正直これから何をするのか分からなかつた。最初は新聞や本ばかり読んでいたのを思い出す。とにかく、今までの仕事とは全然違うものだつた。外に出る機会も多く、人の話も聞く事が多かつた。毎日が新鮮だつた。いろんな方に会つて話を聞くのも楽しかつた。

最初の舞たうんの編集では、テーマを見つけるのに苦労したのを思い出す。自分が何に興味があるのかそれすら分からなかつた。毎日、いろんなジャンルの新聞を読み、楽しみが湧いてくる中で自然とテーマも決まつてきた。編集をとおし

て、自分で勉強することを学んだし、実際に活動者と会うことで、地域の問題を身近に感じることが出来た。

「地域づくり人一〇〇人」という本を発行するにあたつては、いろんな分野の方に話を聞く機会があつた。自分の知らない世界がこんなにもあるのかと気づいた。活動されているみなさんには、目的に對して何とかしようという気持ちが強い人ばかりだつた。その思いが、活動のパワーに繋がつていると感じた。

研究会議の運営委員さんは、みなさんとても熱い方ばかり。実践者の集まりで、また、名前の知られた方が多く、とにかく勉強になつた。毎年テーマを決めて、実際に地域に入つてミニフォーラムなどもしている。地元の人だけではなく、外からの力も借りることで、地域の人が動いていくことを知つた。

コーディネーター研修会では、議論することの大切さを学んだ。研修生の方は、みな違つた意見を持つており、何度も話し合つていく中で、お互いを理解しあつた。相手に自分の考えを説明する難しさを感じたし、日本語は通じているようでは通じていないことも教わつた。

感心するだけでは駄目なんだということも、ここに来て教えられた。このセン

ターでは、いつもどこかで話し合いというか、誰かの声がしていたのを思い出す。

どこかに研修、視察に行った時でも、研究員同士で、職場に戻つたらいつも議論していたような気がする。「あの人の言つていることは違う」とか、「もつとこうするべきだ」とか。僕が人と会つてただ感心していただけとは違つて、そこで、「じゃあどうすればいい」とか、自分の意見を必ず持つっていた。ただ感心するだけで、意見も言えない自分の無知さに情けなくもなつた。もつともっと勉強しないといけないと感じた。

とは言つても、実際に活動している人は凄いと思うわけで、自分が人のことをどうこう言うのには今でも抵抗がある。でも、ここに来て客観的に分析することの大切さを知ることが出来たのは大きなプラスであつたと思う。

地域（田舎）を考える

地域づくりに携わる方とお会いしていく中で、自然と自分の住んでる地域（田舎）についても考えるようになつた。今、田舎は若者も都会に出て行き、過疎化が進んでいる状況である。分業化が進み、専門的な世界で生きていくよう

になつた今、選択の多い都会に出て行く傾向がある。これから田舎は、もつと知恵を出していかなければならないし、地域で稼ぐということも考えていかなければならぬだろう。

田舎にはたくさんの魅力がある。田舎の暮らしには時代の流れとともに失われてきた、人間の基本的な生活の知恵がある。豊かな自然もある。先進地と呼ばれる田舎は、こういった都会では経験出来ない、この地域でしかないものを最大限に活かしていた。いずれにしてもこれらは、地域のことを一番知つている住民が中心となつて、本気で「地域」について考えていかないと何も変わつていかないだろう。

*

*

*

立場の人がいろんな意見を言える、誰もが参加しやすい場があつた。

これからの課題として、地域のことを真剣に考える人をどう育てていくか。また、そういう人たちが活動できる場をどうつくっていくかを考えることが大事になつてくるだろう。

このセンターでの二年間、自分にとつて、たくさんの財産がつくることが出来た。人と人とのつながりも出来た。これからは、つながりだけではなく、お互いが元気を貢えるような関係になりたいと思つてゐる。

最後に、お世話になつた方、迷惑をかけた方、これからも末長くお付き合いの程よろしくお願ひします。

自分が考える地域づくりとは、定番ですが人づくりにつきると思う。地域にあるものを活かして活性化を図る。人が暮らしやすいように生活基盤の整備として、必要なハード施設をつくる。結局それを考へるのは人になつてくる。

センターでいろんな地域を見てきたが、元気のある地域は住民が主体的に活動をしていた。そこには、いろんな

地域づくり

自分が考える地域づくりとは、定番で

あるものを活かして活性化を図る。人が暮らしやすいように生活基盤の整備として、必要なハード施設をつくる。結局それを考へるのは人になつてくる。

センターでいろんな地域を見てきたが、元気のある地域は住民が主体的に活動をしていた。そこには、いろんな

大森の町並みと

生活保存のまちづくり

（島根県大田市大森町）

研究員 清水 和繁



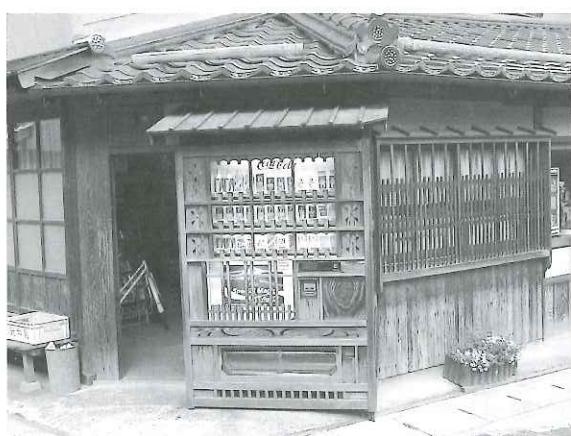
生活感漂う大森の町並み

石見銀山遺跡の世界遺産登録をめざし、全国に情報発信をおこなっている島根県大田市大森町を訪ねた。大森町は幕府直轄領の大森銀山（石見銀山）を有し、銀山を中心に町並みが形成され、最盛期には「銀山七谷家数一万数千軒」と言われたが、人口約五百五十人にまで減少した。大森は過疎によつて結果的に魅力ある町並みが残された町で、過疎の可能性に賭けている町だという。大森に根を下ろした「生き方産業」がそれを側面からしっかりと支えている。

まず、この町は建物がそれほど傷んでいない。町並み景観の優れている全長二・八キロメートルに、周囲にあつた建物が保全され、修景されている。国の伝統的建造物群保存地区で、歴史を生かしたまちづくりが進められ、見ると細長い町で、中央の道路が拡幅されてしまつたら、こうはうまくいかなつただろうが、うまくバイパスが建設され、通り抜けるだけの車から守られたことも大きかつたようである。

次に周囲の自然がよく残されている。代官のいた行政町という性格上、銀山、すなわち山内に入る手前の山の縁に立地し、平地と山林との両方の環境を満喫できるという条件が揃つていて、都市化の

波からもうまく守られ、銀山川の清流や山の緑をすぐ間に楽しむことができる。さらに住んでる人が元気で、プラハウスや、石州セラミカなどというユニーカな企業が育つていて、プラハウスは女性の楽しい田舎暮らしをテーマとしたコットンにこだわった生活雑貨を作つて売る店、石州セラミカはこの地域の特産である石州瓦を製造している協業組合である。ほかにも中村ブレイスという義肢装具づくりの企業などがあるが、大森町は過疎で職場が無いと嘆いているだけではなく、都会に負けない企業を興している人達が住んでいる町で、これは「生き方産業」と呼ばれている。



自動販売機も町並みにあわせ修景されている

平成16年度 まちづくり活動アシスト事業の助成団体決定のお知らせ

今年から当事業の助成内容を大幅に変更し、まちづくり活動に幅広く助成できる事業として、前号の紙面などで事業のPRを行いましたところ、県内の地域づくりグループ19団体（東予3、中予8、南予8）から申請をいただきました。

審査の結果、下記の6団体がまちづくり活動アシスト事業の助成団体と決まりましたので、ご報告いたします。

- 東予市 喜左衛門狸の会（代表 徳田 紀男）
- 松山市 まつやま災害救援ボランティアネットワーク（代表 山内 知照）
- 小田町 ODA の木協会（代表 高本 師津雄）
- 長浜町 今坊ゆうやけの会（代表 津田 博幸）
- 三崎町 らいぶ「あっ。」実行委員会（代表 増田 克仁）
- 宇和町 宇和わらぐろの会（代表 上甲 清）

BOOK INFORMATION

● 農家のためのインターネット活用術（創森社）

竹森まりえ／著 まちむら交流きこう／編 1,400円（税込み）
全国の農家を回りながら、それぞれの農家の農業経営に合ったWebサイトを農家の皆さんと一緒に考え、作成したことをベースに、「農家のためのWebサイト作成のノウハウ」をまとめたものです。これからWebサイトを持ちたい、また、もっているがもっと充実させたいと思っている農家のみなさんへのヒントが満載です。



● 「私が変わります」が地球を守る

【21世紀の人間環境宣言】(三宝出版)

脇本忠明／著 1,470円（税込み）

これまでの人類による社会活動によって、環境を壊してきたことは誰の目にも明らかとなっています。今、問われているのは、新しい社会システム、ライフスタイル、そして価値観の創造であり、これはとても困難な課題ですが、私たち一人ひとりの熱い思いと行動が鍵となります。私が変われば、日本が変わり、世界も変わる。本書は、著者のダイオキシン、PCB研究と教育の長い年月により完成された「環境宣言」です。

お知らせ (財団法人 愛媛県市町村振興協会)

市町村振興（サマージャンボ）宝くじが1枚300円で発売されます。

『サマージャンボ宝くじの賞金は1等・前後賞合わせて3億円！』
『2等だって1億円！』

1等 2億円×42本 前後賞各 5,000万円 2等 1億円×42本

アテネ。

この夏、最大のドラマをあなたに。

サマージャンボ3億円

1等 2億円 / 前後賞 各5千万円 / 2等 1億円

2004年市町村振興宝くじ
7/12(月)発売

発売期間：7/12(月)～7/30(金)
抽せん日：8/10(火)

この宝くじの収益金は市町村の明るく住みよい街づくりに使われます。財團法人全国市町村振興協会／全国市長会／全国町村会／全国市議会議長会／全国町村議会議長会

今号は、自分が当センターに来て、興味を持っていた環境について特集し、実践者の声を聞きながら勉強をさせて頂きました。環境という大きなテーマの中で、絞込みの難しさを感じつつも、セミナーに来て二回目の編集が無事に出来、みなさんのご協力に感謝しています。

これから夏本番ですが、どんどん地域に出かけていきますので、まちづくりの現場の声を聞かせて下さい。

内容についてのご意見やまちづくり活動のトピックなどありましたら、お気軽に『舞たうん』編集係までお寄せください。

〒790-10003
松山市三番町四丁目十番地一
愛媛県三番町ビル二階
（財）えひめ地域政策研究センター
まちづくり活動スタッフ
TEL 089（932）7750
FAX 089（932）7760

印 刷／三創印刷株式会社
(財)えひめ地域政策
研究センター
発行／平成十六年七月十日

☆ <http://www.ecpr.or.jp>

☆ E-mail:info@ecpr.or.jp

本紙は、財愛媛県市町村振興協会の委託を受けて発行しています。